

碧 水

第 4 号

昭和56年1月

静岡県水産試験場

〒425 焼津市小川汐入3690
電 話 (05462) 7-1815

人工魚礁の規模と構造について

我が国における人工魚礁の歴史は古く、今から約200年前の寛政年間にもいくつかの記録が残されています。本県でも、昭和5年に廢艦となった白露(450トン)を、割石250トンや土俵100俵、松、雑木などとともに駿河湾に魚礁として沈めた記録がみられます。写真は、漁場へ曳航されている様子を昭和5年8月9日の東京日日新聞が報じたものです。

人工魚礁が公共事業として国費や県費の補助によって行われるようになったのは昭和27年からで、その頃はコンクリートブロックに限られていました。

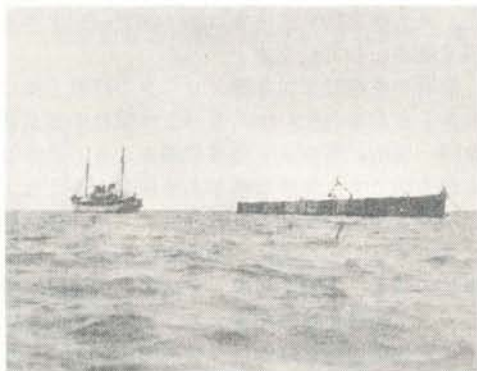
昭和40年代になってからは、コンクリートブロック以外に色々な資材が色々な形状で使われるようになってきました。第1図にそれらのうちいくつかの種類を示しました。

何故魚礁に魚が集まるのか

人工魚礁は、魚類を漁獲するために集まらせることを主目的とし、さらに保護培養する機能



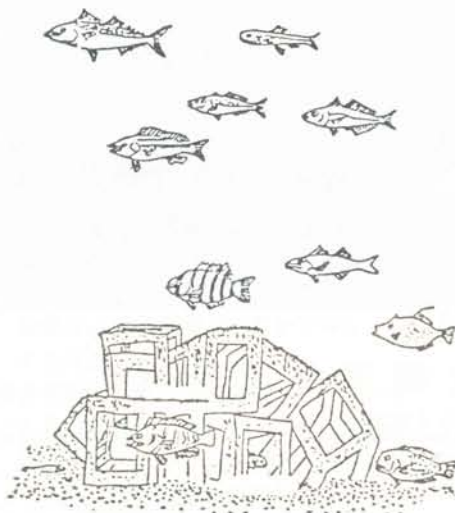
第1図 魚礁の種類 (小川)



も持っています。魚礁に魚が何故集るかについてははっきりと解明されていませんが、大別すると①魚類の持つ本能、②魚類の摂餌要求、③産卵場としての機能を有することなどによるものと考えられています。

魚礁の形状と魚の集る位置

魚礁に集る魚は、第2図に示したように魚礁の上層部に付くもの、魚礁の内部から魚礁周辺部に付くもの、魚礁の底部に付くものに大別されます。一般に、魚礁の上層部につく魚としてはアジ、サバ、イワシ、ワカシ(ブリ)等の浮魚類があります。魚が集る構造物としては天然礁のように海底から円錐状に隆起していることが



第2図 魚礁と魚付きの模式図 (小川, 1973)

大切で、その規模は大きい程よいと考えられています。浮魚類を対象とした場合に必要な魚礁の高さは水深の約1割と云われていますが、水深40~80m海域に存在する天然礁の高さと漁獲状況との関係を見ると、水深に対して40~65%程度の高さの天然礁で漁獲効果があげられていることから、人工魚礁においてもできるだけ高くすることが効果的と考えられます。したがって、設置水深が深くなればなるほど高さが要望されるわけですが、それだけの高さを保つには設置経費がばく大になるので、これを念頭において実施することが望まれます。また、人工魚礁は天然礁のような大規模なものを造ることは困難であり、なるべく空けきのあるものが有利と云えます。これは、アジ、サバのように、魚礁の上部にしか集まらない魚種もいますが比較的魚礁の中層部を利用するイサキ、タカベなどは魚礁の内部をも利用することがあり、さらに幼魚群の多くは魚礁内部を利用するからです。

底魚類は、一般にその魚の性質として物に直接触れる他、物に寄る性質があります。例えばアナゴ、ウツボなどは強い接触刺激を必要とし常に物に体を触れています。アイナメ、メバル、ハタ類などは、普通は魚礁の下部に集り胸びれや腹面など体の一部を物に接触させています。一方、クロダイ、インダイ、マダイ、メジナなどはほとんど物体近くにいるものの体を接触させないでいることなどを考えると、魚礁内部の空隙部が非常によく利用されていることがわかりま

す。このようなことから魚の住み付きには魚礁の表面積と空隙、つまり刺激量と空間構造との組合せが大きく作用していると考えられます。また、底魚類を対象とする人工魚礁においても高さが魚のい集を促す重要な要素として作用し、しかもその魚群量をも左右する要因となります。このようなことから、底魚類を対象とする場合の人工魚礁の高さは1本釣による漁獲状況、潜水調査等の結果からみて5m程度が必要と考えられます。一般に、魚礁では浮魚類ばかりでなく、底魚類をも対象魚種としますので魚礁形状は色々な魚類が集まれるような広がりと高さを有する多峰型の魚礁群としての漁場造りをするのが有効です。

魚礁の規模

次に人工魚礁の規模は魚群のい集する量や、それらが滞留する量あるいは操業可能な漁船数によって決められます。たとえ平坦な海底に置かれた1トン程度の石1個にでも魚の集まっているのが見られても生産効果を見るとこの程度の大きさでは漁場づくりと云えるものではありません。普通、瀬とか礁とか根などといわれるものはある程度の量の魚をい集させることが可能であり、い集した魚群をある一定期間継続的に滞留させ、かつそこで漁獲しなければなりません。そのため、魚礁は或る程度の広がりや規模が必要です。その規模は対象とする魚種、漁業種類、漁船規模によって一様ではありません。沿岸小型釣船を考えた場合、1カ所に少なくとも2~3隻の漁船が操業して1日1隻あたり10~20Kg程度の漁獲が可能な規模でなければなりません。

現在、魚礁事業としては並型魚礁設置事業が400空 m^3 以上、大型魚礁設置事業2,500空 m^3 以上、人工礁漁場造成事業は30,000空 m^3 以上の規模で進められています。

魚礁の生産効果は魚礁ブロックの設置方法に大きく左右されますので、3~5年間位の事業量を同一場所に集中させ魚礁規模を大きくすることが大切です。魚礁規模がある程度大きくなった段階で次に魚礁漁場を有効的に、かつ経済的に造成することを考え、漁場面積の拡大、操業隻数の増大、魚群の誘導、天然礁との関連配置等、人工魚礁を複数配置することも有効的です。

人工魚礁の効果範囲は、普通浮魚類では300m、底魚類では200mであることから礁と礁との距離は浮魚類を主体とする魚礁では600m、底魚

類を主体とする魚礁では400mの範囲内となりませんが、実際には魚礁に集する魚群の大きさ、周辺域の海底地形、漁場環境、利用する漁法あるいは魚道が周辺域に存在するか否かによって違いますので色々な条件を総合的に判断する必要があります。

カツオ、ビンナガ竿釣り漁況と月令との関係について

まき網など沿岸域で夜間操業する漁業では、月休みといって満月付近を休業することが多いようですが、近年、昼間に操業するカツオ、ビンナガ竿釣り漁業でも、月令（新月を0として数えた日数-旧暦にはほぼ同じ）と漁況との関連について色々取りざたされるようになってきました。このような関係を明らかにするため、二、三の検討を行ったので紹介してみましょう。

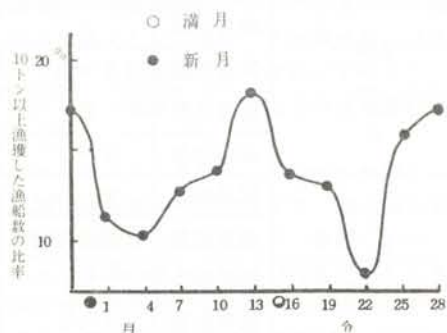
カツオ、マグロ類など、主に釣り漁業で対象とする高度回遊魚の漁況と月令に関する報告は非常に少なく、クロマグロの漁獲について「流網と月令とは関係あり、月令3～11は概して好漁なり」と昭和9年の北海道水試の水産調査報告にみられる程度です。

そこで、当場では、カツオ、ビンナガ竿釣り漁況と月令との関係を知るため、竿釣り漁船から提出していただいた標本船日報のなかから、昭和47年から52年まで6年間の資料を用いて検討してみました。

その方法として、操業日を月令別に分け、標本船のなかで1日の漁獲量が10トン以下の隻数の出現する比率を求め、月令0から順次3日ごとにまとめてみました。

南方カツオについて、その結果を図示すると第1図のようになります。

これによると、月令28と13、すなわち、満月



第1図 南方カツオ竿釣り漁獲と月令との関係

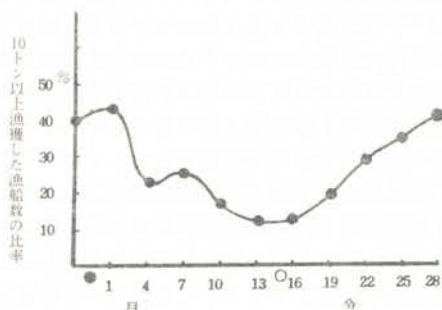
当水試としては、今までの魚礁に來遊する魚群量、生物相互の干涉、魚類の分布する範囲等を参考に魚礁と魚礁の距離を150～200m位の近距離で配置した方が効果的であると考えています。（沢田貴義）

と新月の少し前に好漁の出現率が高いとおおむねいえそうです。

また、同じような方法でビンナガについてみると第2図のようになります。

月令1、すなわち新月を中心とした時期に漁況がよいといえそうです。

カツオでは、月令13、28における1日の漁獲量が10トン以上の隻数の出現率は17%ですが、ビンナガでは月令28、1におけるそれは40%以



第2図 ビンナガ竿釣り漁況と月令との関係 (1日1隻の漁獲の出現率)

上で、月令と漁況との関係は、カツオよりビンナガの方にはっきりみられるようです。

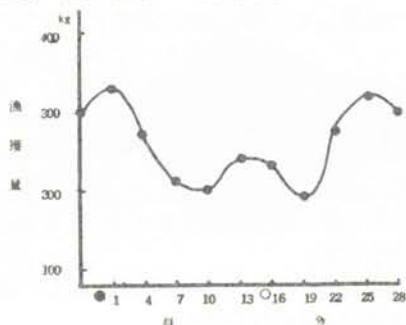
それでは、これらの関係はどのようなことに起因するのでしょうか。このことについては、今後の研究課題として検討されなければなりません。餌料生物との関連も考えられましょう。

カツオ、ビンナガは昼間に餌料生物を捕食することがわかっていますが、沖合に分布する餌料生物の種類は、漁獲されたカツオ、ビンナガの胃内容物の調査から、イワシ、サバ、サンマ、イカ類であることがわかっています。

カツオ、ビンナガ漁場におけるこれら餌料生物の動きについて、沿岸域で昼間漁獲されるものから、これら餌料生物の動きについて考えてみましょう。

静岡県下の吉田漁港に水揚げされるシラス漁況と月令との関係について検討してみました。

すなわち、昭和53年と54年の2ケ年（延343日）の1日1ヶ統当りの漁獲量を月令別にまとめると第3図のようになります。



第3図 吉田(昭和53~54年)におけるシラス漁況と月令との関係(1日1ヶ統当りの漁獲量)

月令13, 16ではその前後よりはやや漁獲量が多くなっていますが、全体的には新月付近での漁獲が多く、満月付近では小さくなっています。

また、パプア・ニューギニアのケヤニーという研究者も、「パプア・ニューギニア沿岸におけるカツオの餌魚の漁獲量は、新月のときより満月のときに非常に少なく、餌魚の漁獲量と月令とは関係がある」と報告しています。これらは、夜間操業されるので、昼間操業されるカツオ、ピンナガ漁況と直接結びつけて考えることはできませんが、今後、このような漁況と月令との関連性について更に魚種間での検討を行い、漁業者の方々が効率的な操業が行えるように研究を進めたいと考えています。（山田万樹）

なると巻の保存向上技術

一 過酸化水素対策一

食品添加物として許可されていた過酸化水素（以下、 H_2O_2 とする）は昨年1月、厚生省から「 H_2O_2 に弱い発ガン性あり」との発表がなされたことによる行政指導が講ぜられ、同年10月1日より、事実上の使用禁止になりました。

この H_2O_2 は、本来、殺菌料として許可されていたが、かなり強力な漂白作用もあるため、水産加工品では練製品、シラス干し、カズノコ等に比較的広く使われていました。本県でも練製品およびシラス干しに使われていたが、この練製品のうち、ラーメンの具やおでん種として知られているなると巻には主として、保存性を高めるための表面殺菌料（約0.6%濃度の H_2O_2 に約30秒間浸漬する）として使用されてきました。

本県の練製品業界は、厚生省の発表を受け、直ちに H_2O_2 の使用を全面的に自粛することを申し合わせると同時に、これに代わる有効な手段を見出すための対策と取り組みました。

この問題の発生経過と当場での初期の対応については、すでに「水産加工だより」第6号（昭和55年3月発行）に紹介しましたので、ここではその後実施した試験結果を重点に H_2O_2 に代わる安全な新しい保存向上技術について紹介したいと思います。

1) pH低下剤による保存効果

食品を酸（主に食酢）に漬けて、食味の改善を図ると同時にその食品の保存性を高めることは、経験上よく知られていることです。同様に、

なると巻を酸に浸漬することは、①その表面のpHを下げて、細菌の活発な繁殖を抑える、②含まれている保存料（ソルビン酸およびカリウム塩）の抗菌作用を強める等により保存性をより高める効果が期待出来ます。

第1表はなると巻を乳酸等を主体にしたpH低下剤に浸漬した場合の保存日数（官能判定や生菌数により算出した食用可能な期間）を対照品と比較したものです。

これによると、各種濃度のpH低下剤に浸漬した試験品はこれを使用しない対照品に比べ、簡易包装、真空包装とも1~2日間保存が延長されますが、その効果はアルコール系薬剤と同じようにあまり顕著ではありません。また、酸の濃度差による効果もあまりはっきりしており

第1表 pH低下剤による保存効果（温度25℃湿度80%で保存）

| pH低下剤の濃度 | 包装形態 | 保存日数(日) |
|----------|------|---------|
| 0% | 簡易包装 | 1 |
| | 真空包装 | 1~2 |
| 1 | 簡易包装 | 2 |
| | 真空包装 | 3~4 |
| 2 | 簡易包装 | 2~3 |
| | 真空包装 | 3~4 |
| 3 | 簡易包装 | 3 |
| | 真空包装 | 3~4 |

ません。

このようにpH低下剤の保存効果は、それ単独では極めてわずかでした。

2) 真空二次殺菌処理による保存効果

従来から、なると巻の製品は加熱殺菌後包装していましたが、包装するまでの浸漬および放冷工程での機械器具や従業員の手指あるいは空気中からの細菌はそのまま製品に残り、これがあると巻の保存性を悪くしていたものと思われます。

第2表は、真空包装後、再度加熱処理（二次殺菌）した場合の保存日数を従来の方法（簡易および真空包装）と比較したものです。

第2表 真空二次殺菌処理による保存効果
(25℃, 80% pH保存)

| pH低下剤の濃度 | 包装形態 | 二次殺菌処理の有無 | 保存日数(日) |
|----------|------|-------------------|------------|
| 0% | 簡易包装 | 無 | 1 |
| | 真空包装 | 無 | 1~2 |
| | 真空包装 | 有(80~85℃ 10分間) | 5~7日 以上 |
| | 真空包装 | 有(80~85℃ 15分間) | 5~7日 以上 |
| | 真空包装 | 有(90~95℃ 10分間) | 6~7日 以上 |
| 2% | 簡易包装 | 無 | 2~3 |
| | 真空包装 | 無 | 3~4 |
| | 真空包装 | 無(80~85℃ 10分間) | 10日以上 |
| | 真空包装 | 無(80~85℃ 15分間) | 10日以上 |
| | 真空包装 | 無(90~95℃ 10分間) | 10日以上 |

その結果、pH低下剤を使用しない製品（対照）でも、真空包装後二次殺菌した製品の保存日数はしないものに比べて増大し、温度25℃、湿度80%の夏期条件においても5~7日間の保存が可能でした。また、2%濃度のpH低下剤に浸漬した製品はさらに保存効果を示し、10日間たっても腐敗せず、保存日数は飛躍的に増大しました。

このようなことから、浸漬液を使用しなくても真空包装後80~85℃以上で、10分間以上二次殺菌処理を行うことにより、夏期においても、5~7日間の保存・流通が可能であること、さらにpH低下剤による浸漬法を併用することにより、相乗的に保存効果が高まり、10日間の保

存・流通が充分可能であることがわかりました。

3) 保存条件による保存効果

一般に、細菌の繁殖速度は温度が10℃上昇することにより、約2倍になると言われており、当然、なると巻の保存性も温度などの保存条件による影響を受けるものと思われます。

第3表は25℃、80%の夏期条件と10℃、60%の冬期条件に保存した製品の保存性を比較してみたものです。

第3表 保存条件による保存効果

| pH低下剤の濃度 | 包装形態 | 保存条件 | | 保存日数(日) |
|----------|------|------|-----|---------|
| | | 温度 | 湿度 | |
| 0% | 簡易包装 | 25℃ | 80% | 1 |
| | | 10℃ | 60% | 8日以上 |
| 3% | 簡易包装 | 25℃ | 80% | 3 |
| | | 10℃ | 60% | 10日以上 |

これによると、なると巻を冬期に保存・流通させるには浸漬液として何も使用しなくとも、簡易包装だけでも8日間は充分可能です。また、夏期においても、10℃、60%以下の低温管理を行うことにより、8日間の保存・流通が可能です。さらに長時間の保存・流通を望む場合にはpH低下剤による浸漬や真空包装を併用することにより、充分な保存性が得られるものと思います。

以上、試験結果のうち主な点について述べてきましたが、これらの対策を講ずることによって、従来のH₂O₂を上回る保存効果が期待出来るものと思います。

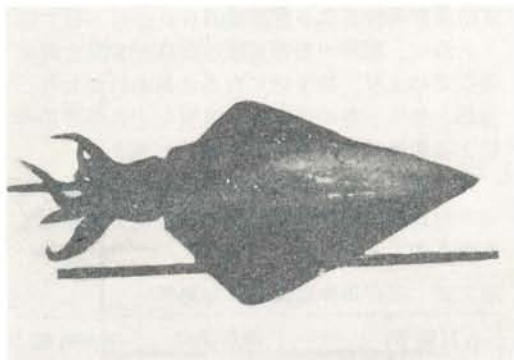
当场としてはH₂O₂対策としての緊急性や設備投資の面から考えて、現在のところpH低下剤による浸漬と真空二次殺菌処理との併用が最も良い方法と考えております。（長谷川薫）

お 化 け イ カ

ー ソ デ イ カ ー

イカといえば、普通スルメイカが広く知られていますが、写真のような巨大なイカをご存じでしょうか。

これは、11月中旬、調査船駿河丸で、未利用資源のトビイカの漁獲試験を実施した際に、11月17日午後8時頃、鳥島の南西海域（石廊崎から南南東およそ480Km）で、たも網（直径65cm、網の深さ100cm）によって捕えたものです。



このイカは全長145cm、赤茶色の外とう(套)部の長さが75cm、胴回りが63cmもあり、体重はなんと13Kgもある「ソデイカ」で、別名「オオトビイカ」とも呼ばれています。

このソデイカは、アカイカ科の仲間でアカイカ(ムラサキイカ、バカイカとも云う)に似ていますが日本近海では、対島～能登半島、三浦～伊豆半島から小笠原諸島周辺などの外洋性の表層に生息することが知られており、台湾、沖縄方面でも若干利用されています。

このイカの特徴は、巨大で、大きく厚いひし形のヒレ(通称耳)が外とうの全長におよんでいること、また、群れをなさずに必ず「アベック」で表層を遊泳していることです。

このイカも2匹で船の近くまでゆっくり遊泳してきたところを、2人掛かりでやっとすくい揚げましたが、逃げたもう1匹は、これよりはるかに大きかったようです。

肉は厚いわりにはやわらかく、刺身としても美味といわれていますが、当场では試食した職員は、まだいないようです。

いずれにしても珍種に属し、貴重な標本にもなりますので、当场の展示館に展示し、皆さんにも見て頂けるようにしたいと考えております。

(原田昌幸)

漁況・海況

● 海況

1) 遠州灘沖大型冷水塊の推移

昭和50年8月から昭和55年8月まで、満5ヶ年にわたって存続した遠州灘沖の大型冷水塊の特徴を振り返ってみたいと思います。

今回出現した大型冷水塊(通称A型と言う、

第1図)は昭和に入ってからでは、昭和10年～20年、28年～30年、34年～37年に次いで4回目でした。このように、出現回数は極めて稀ですが、数年以上にわたって存続し、存続中に多少の変動がみられるものの、冷水塊の位置も形も大きさも極端な変化はなく、ほぼ潮岬から伊豆諸島の間が存在しています。さらに、発生は急激であります、消滅は徐々に進行することなどが特徴としてあげられます。このような大型冷水塊の出現間隔は大ざっぱにはほぼ20年とみてよく、5～10年位持続しています。今期の大型冷水塊は40年間隔をおいて極めて酷似したパターンを再現していました。この冷水塊は昭和50年8月に発生以来、昭和52～53年には最大の規模となり、昭和54年になると、その位置に、東西方向への変動がかなり頻りに認められるようになり、昭和55年8月に消滅しました。

2) 昭和55年の海況の特徴

昭和55年の静岡県下の海況の特徴を振り返ってみます。

(1) 昭和50年8月に遠州灘沖大型冷水塊の出現後、黒潮は昭和55年2月に、初めて八丈島から伊豆諸島の東側を迂回しました。

(2) 昭和55年2月～4月にかけて、黒潮が伊豆列島の西側あるいは東側を流去するなど、著しい変動を示しました。この結果、大型冷水塊出現後、最も著しい海況の短期変動が周辺沿岸海域に生じました。

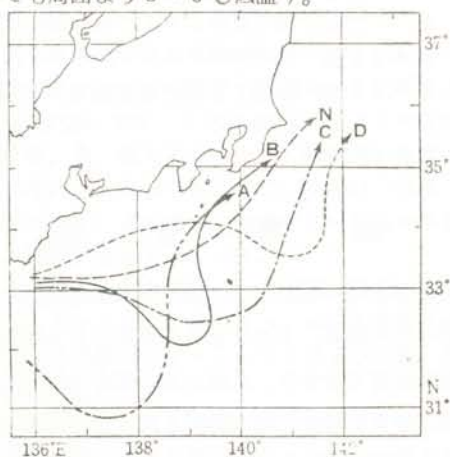
(3) 黒潮内側域(黒潮と本土の間の海域)に相当する遠州灘東部沿岸海域に比較的長期(5～6月前半頃、約1ヶ月)にわたって孤立を示唆する暖水域が出現しました。このように、黒潮内側域に暖水域が出現することは稀な現象です。

(4) 大型冷水塊は昭和55年8月に消滅しましたが、9月以降遠州灘に小規模な冷水域が出現しました。しかし、黒潮は御前崎沖および石廊崎沖60カイリから80カイリと基本的には本土沿岸を平行に接岸型で流れるパターンに転じ、11月頃までこのようなパターンで経過しました。12月に入りますと、小規模な冷水域(小規模なB型、第1図)が出現し、多少蛇行するようなパターンとなりました。

(5) 1月～12月の表面水温の経過から沿岸域の海況を通覧しますと、黒潮流路の変動或いは、気圧配置の変化などにより低温時は2月～3月、5～6月および8月を中心にみられ、この内、特に8月の場合(旬平年比、 -2°C 以下、陸で

も冷夏として話題となりました), 8月上旬をピークとして9月初旬頃まで低温で経過しました。10月には, この低温傾向は徐々に後退し, 平年並あるいは一部の海域ではやや高目となりました。その後, 11月になりますと, 伊豆海嶺北部海域に出現した冷水域 (11月1日~15日) のため, 県下沿岸海域はこの冷水の影響下に入り, 11月中旬前半まで低温で経過しましたが, 下旬以降徐々に平年並となっています。

(6) 9月中旬~10月9日頃 (9月28日ピーク) に伊豆海嶺北部 (大室出し~銭州~三宅島~石廊崎に到る海域) に長期に, かつ広域に出現した低温部は, 稀な現象でありました (表面においても周囲より5~6℃低温)。



第1図 伊豆諸島近海での黒潮流路蛇行の分類 (吉田和三, 1961; 二谷, 1969を包括)

3) 昭和56年3月頃までの海況の見通し

- (1) 黒潮流軸は伊豆海嶺の西側, あるいは伊豆海嶺上で多少離岸して少なくとも2~3ヶ月は蛇行状態が続くものと考えられます。
- (2) 黒潮内側域の水温は全般的には低目が卓越して経過し, 黒潮流軸が離岸する頃に伊豆近海を中心に一時的にやや高めとなるでしょう。
- (3) なお, 既に親潮が鹿島灘に達していますが, 昭和38年の冬季ほどではないにしても, 常磐, 鹿島灘, 黒潮内側域ではかなり低温となることも予想されます。 (中村保昭)

● 漁 況

昭和55年の漁況の特徴

前掲の海況の特徴と関連した昭和55年の県下沿岸の漁況を振り返ってみます。

(1) 関東近海のマサバ初漁期魚場形成は近年お

おむね1月下旬 (“大室出し”, 昭和50年以降) にみられました。昭和55年の場合, この期に黒潮が房総沿岸に極めて接岸し, かつ常磐~鹿島灘におけるマサバ主漁場の南下の遅れおよび房総冷水の南下波及 (気圧系と関連?) が, 2月3日~4日と遅れたため, 初漁期主漁場の形成も2月8日と最近10年間で最も遅れました。

(2) 5月に, 黒潮系水の波状屈曲およびその接岸傾向によって御前崎沖わずか15~20カイリ (金州周辺) に1ヶ月以上にわたってカツオ好漁場の形成がみられました。

(3) 昭和55年の春シラスの初漁日は, 駿河湾, 遠州灘漁場とも3月21日でした。この初漁日から4月下旬までは, 主にマシラスが多獲され, 県内主要6港 (新居, 舞阪, 福田, 御前崎, 吉田, 静岡) での3月の総水揚量は940トン, 1日1カ統当りの漁獲量は600Kg前後で, 昨年同期の776トンを, また4月の総水揚量でも2092トンと昨年の299トンを大巾に上回りました。

しかし, 5月中旬頃からカタクチシラスに変わりはじめてから, 各漁場での1日1カ統当りの漁獲量は100Kg以下に急減し, 一部はシラス漁をあきらめ金州海域へのカツオ漁などに行く船もありました。

この低調な漁況は, 7月上旬頃まで続きましたが, 7月中旬からはカタクチシラスが多獲されるようになり, その後9, 10月を含めた4ヶ月間に5,604トンの水揚げがみられ, 55年1年間の主要6港の水揚量の約60%を占めました。

このように, 本年は4月のマシラスの多獲と, 7~10月のカタクチシラスの多獲がかさなって11月現在での県内の総水揚量は, 10,542トンと昭和51年以降最高の水揚量となりました。

一方, 魚価をみますと, 初漁期のマシラスは, 各市場ともキロ当たり100円台という安値で取り引きされました。その後カタクチシラスに変わってからの各市場での平均魚価は, 7月518円, 8月444円, 9月451円, 10月376円という値で取り引きされました。

(4) 遠州灘沖大型冷水塊の消滅後の8月10日以降から断続的ではありましたが, 御前崎南沖15~20カイリの金州において, 8月~9月に昭和50年以降5年振りにゴマサバを主体としサバ漁場が形成されました。

(5) サクラエビの秋漁は677.6トンで昨年の383.6トンを上回ったが, 過去10カ年の平均1,600トンにはおよびませんでした。

このように、冷水塊の消滅後一、二の魚種の分布、回遊に変化の兆しが現われております。
(中村保昭・水野秀二)

調査船の動き

富士丸

第5次南方カツオ漁場調査

11月15日焼津出港、南太平洋東カロリン海域(3N, 148E)におけるカツオ漁場調査並びに標識放流356尾を実施し、12月14日帰港。

第6次南方カツオ漁場調査

1月29日から3月5日まで、中西部太平洋赤道海域(4~8N, 145~154E)におけるカツオ漁場調査及び水産庁の委託による標識放流並びに焼津水産高校専攻科生徒の乗船実習中。

駿河丸

11月~12月:サンマ漁場調査終了後、小笠原東方海域における未利用資源としてのトビイカの漁場調査及び遠州灘沖合におけるキンメ漁場調査を実施。

1月:一都三県(東京, 千葉, 神奈川県, 静岡県)水試調査船により豆南海域の春サバの漁期前の分布調査及び資源調査を実施中。

本場日誌

- 11月 1日 加工連業者大会(静岡)
4日 分場長会議(本場)
7日 水産振興審議会(静岡)
8日 塚田川陸上処理部会(沼津)
11日 研究報告編集委員会(本場)
12~13日 指定研究(利用加工)中間報告会(舞阪)
14日 焼津市水産振興協議会加工専門部会(焼津)
14~15日 技術連絡協議会(伊東)
18~19日 公害担当者会議(富士)
19~20日 普及職員研修会(富士)
21日 全国虹鱒振興大会(修善寺)
26日 水産振興審議会 遠洋部会(静岡)

- 28日 青壮年婦人活動実績発表大会(静岡)
関東水産統計地域協議会(東京)
12月 2日 分場長会議
3日 薬事法改正説明会
9日 研究報告編集委員会
10日 新内水面総合対策事業(静岡)
11~13日 東海区漁海況長期予報会議(大島)
12日 水産電化懇談会(清水)
16日 栽培漁業検討会
18日 塚田川陸上処理部会(沼津)
22日 予備監査
25日 県加工連団体長, 幹事会(静岡市)
27日 仕事納め
28日 静岡, 茨城沖合通信合同会議(焼津)

編集後記

毎年1月下旬になると始まる伊豆諸島周辺での寒サバ漁が、1月28日の夜から「大室出し」漁場付近で始まり、水試の近くの小川港では、約100トンのサバが水揚げされ久しぶりのにぎわいを見せていました。これから6月頃まで伊豆諸島周辺でのサバ漁が続くこととなります。

しかし、今年の初漁は昨年より10日早かったものの、その後の水揚げは芳しくなく、2月23日現在出漁している漁船は全くみられません。

これは、昨年11月頃から小型の冷水域が遠州灘に発生して次第に東上し、伊豆近海沖に居座って14℃台という冷水にサバ漁場がおおわれているものです。

例年のようにサバの豊漁がみられるよう、1日も早く海況が回復することを望んで止みません。

(山田)

